【１】　銅鐸と朱に込められた思い

１　生徒用資料解説

全国第３位の出土数

銅鐸は長野県から九州地方にかけての西日本各地で確認されている。しかし，その分布には明らかな偏りが見られ，近畿地方，山陰地方そして四国地方の東部に集中している。一方同じ青銅器であっても銅矛・銅戈は九州地方，四国地方西部に，銅剣は瀬戸内地域に集中的に分布している。同じ祭器であっても種類によって流行する地域・時期が異なっている。同じ種類の青銅器を保有する地域のまとまりは共通した祭祀を執り行っていた文化圏と考えられている。

最も古い銅鐸

日本列島で青銅器が最初につくられたのは，弥生時代前期末から中期初頭(B.C　２世紀)である。大阪府茨木市東奈良遺跡で出土した小銅鐸は最も古いタイプとされている。

最大の銅鐸

現在知られている銅鐸のうち最も大きいものは，滋賀県野洲市小篠原字大岩山で出土した袈裟襷(けさだすき)紋(もん)銅鐸で，総高 134.7 センチ，重量 45.47 キログラムに達する。徳島県内では徳島市国府町で出土した矢野銅鐸（総高 97.8 センチ，重量 17.5 キログラム）が最大である。

銅鐸をつくる

弥生時代の日本列島では銅の生産は行われていない。したがって，青銅器の素材となる青銅を中国や朝鮮半島との交流で入手していた可能性が高い。

銅鐸は，現代の南部鉄瓶や銅鐘といった鋳物製品の製造方法と同じように，高温でドロドロに溶けた青銅を鋳型に流し込んで製造する。熱が冷めて鋳型から取り出された銅鐸は，丁寧に研磨されて金色に輝いていたであろう。鋳型には石製と土製の２種類があった。大半の鋳型は石製であるが，奈良県田原本町の唐古鍵(からこかぎ)遺跡では土製の鋳型が出土している。なお，徳島県では鋳型は見つかっていない。

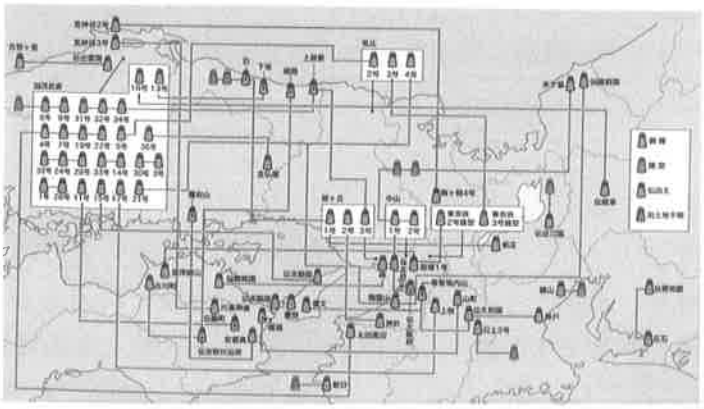
東奈良遺跡(大阪府東大阪市)出土の銅鐸石製鋳型

兄弟の銅鐸

石製の鋳型は丈夫であることから，１つの鋳型から複数の銅鐸を製造するこができた。同じ鋳型で製造された兄弟の銅鐸を「同范銅鐸」と呼んでいる。これまでに７個の同范銅鐸が確認された例もある。徳島県で出土した銅鐸の同范銅鐸は海を越えた近畿地方・中国地方で見つかっている。製造地が同じであると考えられる同范銅鐸が移動する背景には，弥生人の広域な交流網がうかがえる。

徳島県出土の同范銅鐸

川島銅鐸（吉野川市）　－　加茂岩倉遺跡銅鐸（島根県雲南市）
伝脇町銅鐸（美馬市）　－　荒神谷遺跡銅鐸（島根県出雲市）
安都真１号銅鐸（徳島市）　－　種松山銅鐸（岡山県倉敷市）
伝榎瀬銅鐸（徳島市）　－　山町銅鐸（奈良県奈良市）



同范銅鐸関係図

銅鐸に託された想い

銅鐸は紐を通して吊すための鈕（ちゅう），文様が描かれる身（み），文様が描かれない裾（すそ）で構成されている。内部は空洞で裾の内側に突出した部分をめぐらせている。これを内部突帯（ないぶとったい）と呼んでいる。音を鳴らす時は，内部に吊した舌（ぜつ）と呼ばれる棒（金属製もしくは鹿角製）を内部突帯に接触させて共鳴させる。実際，島根県荒神谷遺跡や兵庫県桜ヶ丘遺跡で出土した銅鐸には内部突帯が著しく摩滅しているものがあり，銅鐸が長期間使用されていた事を示している。このように音を鳴らす事に意味のあった銅鐸であるが，徐々に大型化し，鐸としての実用性からかけ離れていく。大型化に伴い内部突帯も退化していき，ついには鐸としての機能を失ってしまう。このような銅鐸の本質的な性格の変化を，考古学者の田中琢は「聞く銅鐸から見る銅鐸へ」と表現している。

銅鐸は村人共有の祭器

九州地方で出土する銅矛や銅戈は甕棺墓に副葬された状態で出土することが多いので，有力者が個人で所有する権威の象徴であったことがわかる。いっぽうで，銅鐸は墓から出土することは少なく，集落やその近辺に埋納された状態で出土する。西日本に普及した銅鐸は集落で共有する祭器であったと考えられている。

神聖な色　朱

弥生時代の赤色顔料である朱には，水銀朱（硫化水銀）とベンガラ(酸化鉄)の２種類がある。ベンガラの原料は鉄分の多い岩石(鉄鉱石)や土であり，これらの原料を精製，焼成することで生産される。容易に入手できたベンガラは縄文時代以来さかんに土器に塗布されたり，漆に混ぜることで赤漆に加工されてきた。いっぽう，水銀朱は原料である硫化水銀を産出する水銀鉱山が少ないため，ベンガラに比べ貴重であった。それでもベンガラに比べ鮮やかな赤色を発する水銀朱の生産が途絶えることはなかった。古代中国では朱に不老不死の力があると信じられ服用されることもあった。ただし，現在の科学では有毒物質が含まれるため，体に良いものでないことが明らかである。

朱の使い分け

生産量が異なる水銀朱とベンガラでは明らかな使い分けが見られる。弥生時代終わり頃から古墳時代前葉の有力者の埋葬には朱が欠かせなかった。ベンガラは石室や木棺の広い範囲に多量に塗布されるのに対し，貴重な水銀朱は横たわる被葬者の周辺に限定して塗布されることが多い。

採掘された水銀朱のゆくえ

若杉山遺跡で採掘された水銀朱を含む岩塊はどのように流通していたのか。板野郡板野町に所在する弥生時代の集落遺跡である黒谷川郡頭(こうず)遺跡では，朱に関連する遺物が豊富に出土したことで注目されている。竪穴式住居からは，水銀朱塊の細片，朱の付着した土器，そして水銀朱塊を粉末化するための石杵・石臼が出土した。この粉末を容器に入れて水に浸し，比重を利用して不純物である砂粒を取り除くことで水銀朱が作り出される。弥生人は若杉山遺跡で採掘した水銀朱塊を直線距離で約 30km はなれた集落へ持ち込み，水銀朱を生産していたのである。黒谷川郡頭遺跡は旧吉野川流域という水上交通に便利な立地に築かれた集落であることから，作り出した水銀朱を各地に搬出する拠点的集落なのではないかと考える意見もある。

銅鐸と朱

農耕祭祀に関わる祭器と考えられる銅鐸と，魔除けを意図して埋葬施設に塗布される朱では，同じ神聖なものでも明確な使い分けが行われていた。しかし，全国でわずか１０数点であるが，朱が塗布された銅鐸が見つかっている。徳島県では伝長者ヶ原１号銅鐸(阿南市)，源田銅鐸・星河内美田銅鐸・名東銅鐸(徳島市)で確認で確認され，他地域に比べ朱を塗布する確率が高い。徳島県が水銀朱の産地であることと関係あるのかもしれない。

２　銅鐸を見学できる施設

・徳島県立博物館　・徳島県立埋蔵文化財総合センター　・徳島市立考古資料館
・野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)　・辰馬考古資料館

３　参考文献

・北條芳隆 1998「阿波の銅鐸と朱」『川と人間－吉野川流域史－』渓谷社
・佐原真 1996『祭りのカネ銅鐸』講談社
・田中琢 1970「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』５角川書店
・島根県立古代出雲歴史博物館 2012『弥生青銅器に魅せられた人々－その製作技術と祭祀の世界－』

・大阪府立弥生文化博物館 2011『豊饒をもたらす響き銅鐸』
・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1996『弥生の精華ー銅鐸に迫るー』
・市毛勲 1998『新版朱の考古学』雄山閣

4　授業の目標と授業過程

（1）授業の目標

・徳島県で多く出土している弥生時代の祭器である「銅鐸」を取り上げ，弥生時代の稲作の開始とその内容を確認するとともに，弥生人の精神生活について考える。

・「朱」の使用の学びを通して，魔除け信仰の広がりと古墳時代の埋葬法を確認し，古代の人々の精神生活の変化について考える。

（関心・意欲・態度）

・「銅鐸」，「朱」を通じて，古代の人々の精神生活を理解しようとしている。

（思考・判断・表現）

・「銅鐸」の分布と弥生文化の広まりの一致及び，社会の変化に伴う「祭り」の変化を思考・判断し，説明することができる。

（資料活用技能）

・教材や教科書の資料を思考操作することにより，古代の人々の精神生活を復元することができる。

（知識・理解）

・弥生文化の内容を理解することができる。

・祭器の変化等の理解を通して，古代の人々の精神生活の変化を理解することができる。

（2）授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	○弥生文化の学習内容の復習。 ○徳島の出土数の多い「銅鐸と朱」を取り上げ，古代の人々の信仰について学習することを聞く。	○稲作と金属器の使用が特徴であることと，北九州から広まったことを確認する。 ○「銅鐸と朱」を取り上げることによって，生徒の古代の人々の精神生活の理解に近づこうとする態度を準備させる。
展開	○「銅鐸」の説明を聞き，理解する。 ○「銅鐸」の出土数が多い地域を考え，その理由とともに，発表する。 ・「銅鐸」の出土分布が，弥生文化の広まりと一致することを理解する。 ○弥生人が，なぜ，銅鐸をつくったのかを考え，弥生人の精神世界に近づく。 ・つくった理由を発表する。 ・豊作を祈る祭器（道具）であるとともに，共同体によって豊作の祈りが行われていたことを理解する。 ○古代人の特別な色について，自由に考えを発表する。 ・「朱」が棺や石室に使用され，魔除け的な役割を果たしていたことを理解する。 ○「朱」がどのようにして，つくられたかを理解する。 ・県内にその当時最大の辰砂採掘遺跡があったことを理解する。 ・「銅鐸」を使用したマツリが行われなくなっていった背景について考える。	○弥生文化を構成する金属器，青銅器であり，大陸（中国）起源説があることを理解させる。 ○日本地図を提示し，「銅鐸」の分布が弥生文化・稲作の広まりと一致することを理解させる。 ○「銅鐸」に描かれた稲作・水田に関係する事項を確認する。 ・「銅鐸」の考えられる使用方法から，むらの共有祭器であることを理解させる。 ・共有祭器を使用する社会について，考えを深めさせるよう留意する。 ○「魏志倭人伝」の記述を紹介し，古代における「朱」のマージナルな意義を理解させる。 ・石室の使用例から，特定人物の葬送に関わりが深いことに気づかせる。 ○若杉山遺跡の立地と出土遺物を説明する。 ・県内に点在する辰砂加工遺跡と弥生時代末期から古墳時代にかけて主に古墳内部で使用されることを理解させる。 ・古墳時代になると，「銅鐸」を使用したマツリが行われなくなったことを説明する。 ・弥生時代後期の社会変化の一要素として「倭国大乱」があることを気づかせる。
結論	○まとめ ・「銅鐸と朱」を通じて，古代人の精神生活を理解する。 ・徳島県からの出土が多い遺物の研究を通じて，古代の世界が明らかになっていくことに気づく。	○「銅鐸」を使用し，むら人共同で豊作を祈るマツリと，「朱」の持つ魔除けの思想と，有力者の墓での使用を再確認させる。 ・考古学の出土品から，古代人精神生活をうかがい知ることができることを気づかせる。

5　評価規準

○教材の資料を思考操作することにより古代の人々の精神生活を復元することができる。

○「銅鐸」の分布と弥生文化の広まりの一致及び，社会の変化に伴う「祭り」の変化を説明することができる。

6　板書計画

銅鐸と朱に込められた思い

●「銅鐸」について　→　青銅器，大陸（中国）起源説

●「銅鐸出土数が多い県」

西日本中心に出土，徳島県第3位　→　稲作との関係

●「弥生人は，なぜ，銅鐸をつくったのか？」

hint：伝香川県出土銅鐸絵画　→　稲作・水田に関係する事項を確認

↓

豊作を祈る祭器（道具）としての銅鐸

●「古代人の特別な色は？」

hint：鳴門市西山谷2号墳石室　→　朱が塗られた石室

↓

棺・石室に朱を使用　→　魔除け・神聖な色

●「朱色は，どのようにしてつくられたか」

hint：若杉山遺跡の立地と出土遺物　→　辰砂・鉱脈と石杵・石臼

↓

辰砂加工遺跡の点在と古墳での使用　→　古墳時代に使用のピークを迎える

●まとめ

古代人の精神生活　→　むら人共同で豊作を祈る：銅鐸

魔除けの思想と，有力者の墓での使用：朱